

分科会
高等学校

第12分科会

福岡県立修猷館高等学校

第13分科会

福岡県立福岡工業高等学校

研究の実践

ア 運動教材の選択・開発 『着眼点 より』

課題ボードの活用

各グループで課題ボード（作戦用ホワイトボード）を活用することによりボールを持たないときの動き方やオフェンスとディフェンスの位置関係等が理解しやすい。また、生徒相互に作戦を考えたり教え合ったりする場面が多く見られ、チームの課題解決にも効果がみられた。

視聴覚教材の活用

実践的な動きをイメージするのが不得意な生徒達にバスケットボールを題材にしたアニメーションDVDを見せることで、様々な試合の場面の動きを視覚的にイメージさせようと試みた。生徒達はそのプレーを真似て攻撃してみたり、ボールを持たないときの動きで、ギブ&ゴーやスクリーンプレーの動きを試してみたりするといった良い効果が得られた。

イ 運動する喜びを味わわせる単元構成と具体的な支援の工夫 『着眼点 より』

課題練習

「安定したボール操作」が出来るように個人やチームの課題に応じた基本練習を4種類の中から選択させ、行わせた。生徒一人一人積極的に授業に取り組み、楽しんで自分達の課題発見と課題解決に努められるように経験者に教えてもらうなど学び合いの姿が見られた。

課題練習

「ボールを持たないときの動き」を意識出来るように、4種類の集団技能（3on3）練習を取り入れた。生徒達はチームの特徴に応じて練習を選択していた。スクリーンを使った練習では課題ボードを使い「壁」のイメージを明確化して仲間と協力してシュートを入れることを考えさせ、試合に活かせるように工夫をさせた。

課題練習

苦手な生徒も積極的にプレー出来るように、ボールがリングタッチしたら、1点、リバウンドゲットで1点など特別ルールを設けた。そうすることにより、得意な生徒が苦手な生徒を活かしたり、助けたりする援助の場面が多く見られた。

ウ 評価計画を位置づけた単元の構成とその評価を踏まえた具体的な支援の工夫

『着眼点 より』

授業開始前アンケート、授業後の自己評価の実施

中学校での授業の内容、生徒の単元（バスケットボール）に対する意識や技能到達レベルを確認し、授業展開や指導計画、教材づくりに活用した。

生徒ナンバリングシステム、一人一役の実施

グループ8班を8色のゼッケンで色分けし、各班の班員をナンバリングした。スキルテストを実施し、1（バスケ経験生徒）を審判長、2（得意生徒）をスコア長、3（得意生徒）を道具長、4（苦手生徒）をマナー、安全長、5（苦手生徒）をムードメイク長にして、全員に役割を与えた。このことにより、生徒一人一人が自己の役割を積極的かつ責任を持って果たそうとする態度が見られた。また、生徒の学習の姿がナンバリングにより把握し易くなった。加えて、バスケットボール経験がある生徒や得意な生徒、苦手としている生徒の間で教え合い、学び合うという相乗効果が見られた。

授業後の自己評価の実施

毎時、授業終了時に生徒の達成度や満足度を学習ノートに記入させ、段階ごとの生徒の興味・関心や到達度を把握し、授業づくりの課題を明確化し授業の工夫・改善に努めた。

エ 課題と反省

入学時での技能、意識格差にどう取り組むか。

中学校と高校入学年次の接続をスムーズにし指導内容の体系化を図るために、生徒一人一人の単元（バスケットボール）の経験や技能レベル、中学校での授業内容を把握した。事前アンケートの結果からバスケットボールが得意な生徒と苦手な生徒の間に大きな技能や意識の差があった。このような生徒達の技能を伸ばし、いかに達成感や満足感を持たせるかが大切であり、授業内容や教材研究が必要であると感じた。

言語活動、コミュニケーション能力をどう向上させるか。

課題練習の中で、せっかく空間に侵入して、ボールがもらえる位置にいるにも関わらず、そのことを、言葉にして伝えられない生徒が多く見られた。チーム練習の中でもっと、瞬時に情報を伝えれば、さらに、高いレベルで試合が出来るようになるので、普段の授業から意図的に考えを表出させるような場づくりの工夫が必要であると感じた。

安全な環境をどう整備していくか。

安全の確保という観点から、5 on 5 のオールコートでの課題練習の際にぶつかったり、転倒したりする生徒が見られた。そこで、指導者としての安全に対する意識の向上と、コートの周りで見ている生徒がプレイヤーに対して、安全に対する目配りや声かけをするなど相互に意識し合うことを指導していく必要があると痛感した。

以上、課題や反省はまだ数多くあるが、体育的学力を身につけさせるために、これから、さらに、授業づくりの工夫に努め、生徒のために精進していきたいと考えている。

3 研究協議

(1) 分科会研究構想について

【着眼点】運動教材の選択・開発

柔道の授業において、「初心者に対する柔道学習の工夫」を中心にした男女共修の学習を展開する。また、狭い柔道場のため「グリッドプラン」を用いて授業を進め、見取り稽古の観点を養い、安全や他人に配慮する生徒を育てる。

ゴール型の球技であるバスケットボールの指導において、ボール操作やボールを持たない時の動きを高める様々な教材・教具を取り入れての授業展開を試みる。

【着眼点】単元構成と具体的支援の工夫

「できる」「わかる」「かかわる」喜びを「活用する」喜びに発展させ、確実に体育的学力を身に付けられるような単元を構成し、その構成に応じた具体的支援を工夫する。

【着眼点】評価計画を位置づけた単元構成とその評価を生かした具体的支援の工夫

学習活動における生徒の反応や目標への到達状況から、その単元構成や生徒の状況における教師の具体的支援のあり方が適切であるかを判断する。

「評価基準」に基づいてその生徒の状況を把握し、具体的支援の工夫をする。

(2) 公開授業について

保健体育科の指導目標について

質問：授業の単元計画は、各担当者で立てられるのか、それとも保健体育科で構成されるのですか。(青森県)

回答：年間指導計画に基づいて各学年、学期ごとに計画しています。例えば柔道の授業は、1年生の3学期に実施するクラスマッチに向けて初心者段階から授業を始め、約30時間の単元計画で試合ができるように工夫しています。その他の単元についても各学期ごとのクラスマッチに向けて授業を構成して、試合・ゲームができるように指導しています。

質問：授業を見せていただくと、生徒さんの人間関係が大変良いと感じました。クラスの雰囲気づくりや生徒の帰属意識の形成について、どのような取り組みをされているのか、またクラスマッチ等の学校行事と授業の関わりや実施時間の取り扱いについて教えてください。(沖縄県)

回答：学校行事と体育授業の関わりについては、学校の活性化という観点から重要なものとなっています。クラスマッチ等の体育的行事は、すべて学校行事です。各学期・学年ごとに行うクラスマッチを念頭に授業の単元計画を構成して、試合やゲームに向けてグループやチームの連携や協力体制を促しています。本校には、生徒会活動のスローガンに「チーム福工」というものがあり、生徒の帰属意識、連帯意識の醸成に大きく影響を与えています。例えば、2学期に実施する2日間の体育祭に向けて1学期の行事である新入生の宿泊研修に各学科の3年生リーダーが同行し、校歌、応援歌、集団行動等の指導を通じて生徒同士の交流を図り、協調や融和の精神を養い、福工生としての自覚を高めています。

質問：各学年における保健体育科指導目標を決めているのですか。(大分県)

回答：本校の生徒は、6割が就職するという状況を踏まえて挨拶をはじめとする自律心の育成に力を入れています。1・2年次は、クラス単一の授業であり、基礎・基本の育成及び自主的活動を促すことを目標にしています。3年生では、3クラス合併の形態で選択制授業を行い、選択の幅を広げながら個人の活動を重視して、主体的に責任を持って行動できる態度等を養っています。また3年生では、3年間クラス替えがないため、特に他学科の生徒との交流を図るように配慮しています。

柔道の授業について

質問：男女共修における授業の工夫について教えてください。(福岡県)

回答：男女の人数割合によって、指導内容を構成して授業展開の工夫をしています。男子に対しては乱取り等のダイナミックな練習の場面を多く取り入れ、女子には受け身や簡易的な試合等を取り入れるようにしています。

質問：授業の進度について教えてください。(大阪府)

回答：授業全般を通じて、安全面の配慮や相手のことを考えた行動がとれるよう指導しています。単元計画では、1年間の授業説明や授業に対する心構えの指導から始まって7～8時間目まで受け身や寝技、立ち技の約束稽古等を中心に基本練習を行います。クラスの進度によって違いがありますが、10時間目前後から乱取りを導入します。20～30時間目でクラスマッチに向けての審判法や試合の進行が行えるようにしています。

質問：体育的学力を向上させていくために、評価をいかに工夫されているか教えてください。(石川県)

回答：授業最初のオリエンテーションで、シラバスによる授業内容やスキルテスト等の提示を行います。毎時間の授業では、生徒に「柔道ノート」を活用させて自己評価や形成的評価を取り、知識・理解、思考・判断等の体育的学力を高めていく工夫をしています。また「教師の観察ノート」により、生徒の関心・意欲・態度、運動の技能等を観察し、「つまずき」のある生徒や個人の課題を明確にすることにより、次回の授業では生徒の問題解決を図るための授業改善に役立てた。柔道ノートの活用では、はじめは「痛い、きつい」といった否定的な評価も見られましたが、徐々に仲間に対するアドバイスができた、協力、声援、他者の補助といった肯定的な評価に変わっていききました。



バスケットボールの授業について

質問：元気が良く、グループ内の発言がポジティブな発言ばかりで部活動のような雰囲気でしたが、生徒間のネガティブな発言（きつい、だるい）はないですか。もう一つは、体育館での授業でも帽子を着用させているのはなぜですか。（熊本県）

回答：生徒に対しては、能力の違いはあってもあえて言わないようにしています。指導やアドバイスも肯定的（ポジティブ）にムードを盛り上げるように配慮して否定的（ネガティブ）にならないようにしています。帽子の着用は、どの単元でも授業開始時の準備運動では着用させています。

質問：各グループのリーダー育成が非常にうまく成されているが、工夫されていることは何ですか。（石川県）

回答：公開授業を行ったクラスにおいても、専門的なバスケットボールの経験者が少なく、体育委員や各グループのリーダーは、様々な部活動生を中心に構成しています。部活動生がムードを盛り上げてリーダーシップを発揮することによって、他の生徒も積極的に協したり活動するようになり、全体的な雰囲気も向上しています。



4 指導助言・まとめ

指導助言者：香川大学 教授 山神眞一 先生

(1) 成果

発表校である福岡工業高校生徒達の元気の良さは、特筆するものがあり、学校の長い伝統に培われた生徒たちの頑張っている姿が印象的であった。研究については、全般的に新学習指導要領に則した授業内容であった。

学習内容の明確化がなされたバランスの良い内容であり、技能、態度、知識・思考判断といった生徒の体育的学力を育むために十分なものであった。

指導と評価の一体化が見られた。学習内容の評価においては、保健体育科として指導の観点を工夫しながら授業に取り組まれている。

教材開発の工夫が見られる。柔道授業におけるグリッド学習、バスケットボール授業においてゼッケン番号で技能程度を表したり、役割分担をする手法等は、グループ学習や課題学習の面からから見ても効果的であった。

通常の武道授業は一斉授業になりがちであるが、グリッド学習によりグループ学習の方向性が示唆されている。バスケットボールでは、チームの状況や場面に応じてグループ学習を効果的に取り入れている。

運動観察の導入。柔道のグリッド学習では、見取り稽古を取り入れることにより安全面の確認や技術の向上に繋げている。バスケットボールの学習では、作戦・戦術のあり方等を他チームを観察し、グループで話し合うことにより効果を上げている。

学習の展開においても「できる」「わかる」「かかわる」喜びを「活用する」喜びへと発展させる授業内容であった。

学校行事（体育的行事）と保健体育科の関連においては、学校全体として取り組まれていることが、学校の活性化、生徒の帰属意識の高揚や自律心の醸成に影響を与えていることが理解できた。

(2) 課題

柔道

- (1) 礼法に重きを置きすぎる面があるが、本時はスムーズであった。
- (2) 対人性や伝統・文化の継承を念頭におく。
- (3) 演武性・技能のできばえを評価する。
- (4) 学び直し授業の必要性和生徒の実態を踏まえた授業内容。
- (5) 対人性...柔道における引き手の重要性（相手を重んじる態度、安全性）

バスケットボール

- (1) ゴール型の集団的スポーツであるが、個人と個人の向かい合いを重視する。
- (2) ボールを持たないときの動きの指導を更に工夫する。
- (3) 人間関係能力の育成。
- (4) 運動の社会的能力の育成。
- (5) 自己有能感の醸成。